

鈴木とく

私は昭和九年に、それまで大嫌いと言っていた先生と呼ばれるようになりました。今、坂元先生、菊池先生にうかがったその当時の幼稚園とは、全く何の関連もないようなことを、子どもたちといっしょにしていたことを、このような所でお話するのはお恥ずかしいような気がします。私が昭和十二年頃まいりました東京市の方面館託児所は、ほとんど底辺生活から浮かび上がった生活の困窮の人たちでした。が、私が最初に参りました昭和九年の頃の東京帝国大学セツルメントのありました本所地域の生活者は、大きな工場とか市電の車掌さんとかの職業の方が多く住んでおりました、方面館託児所の家庭よりは、ややましな暮らしをしておりました。しかしお母さんたちはみんな内職をしなければ生きていかれないという家庭でした。

保育の新しい試みなどと言われましても、私は保育所のことは何も知りませんでしたから、「こういうことをしたらどうか」と思ってやったことが、あとから理屈づけしますと、何か新しいことのようになりました訳でございます。で、その原因は何

かと言いますと、保母は三人で、用務員もなく、他に給食を作る方と、時々学生さんが手伝って下さるだけで八十人余りの子どもたちの保育をしましたので、何から何まで三人でしなければなりませんでした。ですから、学校にあがるまでの子どもたちを、一応その当時の幼稚園がしているように、年齢で組分けをしていたわけでございます。それでは、一番小さい子ども（当時数え年三、四歳）を受け持つ先生は、どうにもしようがなかったんです。何か保育以前のセツルメントの用事でぬけてしましますと、二人だけで三組の保育をしなければならなくなり、そういうことが度重なりますと、このような組分けでいいのかしら、というわけで、窮余の策で考えたことが、少しは年長の子どもにも手伝わってもらえることもあるのではないかしらということで、年齢混合組をつくっては、ということ、年齢混合組の保育がはじまった、と私は思っております。

思いつきはそうでしたけれども、あとからつけましたもうひとつの理屈があります。

当時のセツルメント託児部というのは、教育学部の学生さんや、OBの方とか、当時託児部につとめておられた、現日福大の浦辺史さんとか、いろんな方たちがよってたかかって私たちの保育のやり方へ批判を向けて、どうしてそういうことをするのか、とか、それはどういう意義があるんだとかとやっつけられますので、それに答弁しなければならぬという状況に置かれておりました。

まあ、もとはと言えば、私たちの人手不足からくる試みというつもりで、年齢混合のことを出しましたけれども、その方たちから、セツルメント託児部の方針として、初歩的な社会的集団生活の訓練ということが出ておりましたので、じゃ、それを効果あるようにするには、この少ない保母たちでどうしたらよいのか、ということから、年齢のちがう集団の中で生活することがよいのではないかということ、皆で話し合った末実践してみようということに決まりました。

それからもうひとつは、親たちが忙しいので、ふつうの家庭に育つ子どもたちの、社会生活のうえで必要な良い習慣というもの、あまり身につけられていなかったものだから、もし子どもたちが世の中へ出た時に恥をかくことがあったら大変だなあと、私は心配しました。その頃、ちやうど栄養給食がはじまりました

ので、食事の時にいろいろと食事のし方とか、みんなでおいしくお弁当を食べるといふふうなことを、どのようにしたらよいのかというふうなことを、かね合わせまして、大きい子どもが小さい子どもの先生になるような形を考えたらいいんじゃないか、ということをやってみることになった訳でございます。また他に、親子ぐるみ、地域ぐるみで、子どもたちの生活向上をはかろう、子どもたちの育て方というものの向上についても、新しい組分けを通じてやれるのではないか、ということも話し合いの中に出されました。

当時の私たちの保育園は、横丁集団みたいなものでした。子どもは横丁や露地で遊んでいる時、大きい子ども小さい子ども、いっしょになって遊びます。その間に、大きい子からいじめられまされども、時にはやさしくいろんなことを教わったり、遊んでもらったりします。皆さん方にも、それぞれ遊んだ御経験があると思いますけれど、私はこの横丁での遊びを考えておりましたので、遊びの姿は、何も形式的に幼稚園のまねをする必要はないんじゃないかというふうな、若気のいたりとも申しましようか、反発心がありました。こうした組分けの保育をする間に、いつも話し合いになったのは、それじゃ年齢に合った、基本的なものや知的なものはどうするんだということでした。それはそれで、時

々、同年齢であつて、子どもたちに合ったような遊びをすればいいんじゃないかという提案をいたしました。ですから主体は、居住地域によつた年齢混合組で、同年齢に分かれた遊びは時々するというものでした。

こんど頂いたお手紙に、指導理論というものがあつたか、ということがありますが、だいたい保育がどういうものかも知らないで保母になつたのですから、指導理論などというものは私自身には、何もなかったと言えます。託児部会の保育方針打合せで討議された方針が、指導理論と思ひます。

今、坂元先生がずっとお話になりました新しい教育運動というもの、私は、小学校、高等女学校、私が学んだ東京の学校で、それぞれ新しい教育運動について考えておられた先生に教わる中で、経験として思ひ出されます。

そうされて来たことが、何となく、子どもたちを保育する時に出て来たんじゃないかなと思われまふ。身をもつて経験したことが間接的に新しい教育のにおいとなつて高まつただろうと思ひます。

実践のおもしろさを言うようにとの御注文ですが、これもまた、あれで幼児教育なんだろうか、とお思ひになる方があるかも知れませんが――。

朝、給食の献立がわかつていますので、「今日は、何と何を買いにいくのよ」といいますと「ほくも行く」、「私も行く」と言う子どもたちを十人位つれ出して市場へ行って、観察もかねながら買出しして、持てる物は子どもたちが持つて帰ります。そうしますと、待ちうけていた子どもたちが、芋を洗う、今頃の季節でしたら、さやえんどうの芯をとるだとかして、運び役は給食堂まで運び方をするなど、別に当番ということではなく、年齢なりにやりたい子が先生の手伝いをおもしろうにするという風でした。他の子どもは、それぞれ好きなことをして遊んでいました。私が幼稚園でするいろいろなことを知らなくても、とても面白く半日が過ぎてしまいました。保育五項目から言いましたら、これは何なんでしょうか。手技とも言えないし、観察だけでもございませぬし。ですから本番で大人の生活に参加させると言つたほうがいいんじゃないかなと思ひます。私たちが忙しげに庭やホールを掃除しているのを見つめますと、さつさと箒を持つて来て、下手ながら――ゴミを散らすようなものですけれど、手伝つてくれる子どもがあらわれまふ。塵取りにゴミを入れますと、さつさと捨てにいってくれます。幼稚園で子どもを手伝わせているのかなにかわからないと発表されたこともありまふけれど、結構喜んでしてゐる所を見ますと、あながち、こういうことも悪いことではない

なあと感じておりました。私はその頃の上下関係というものに反発をもっておりまして、上の人に対して下の人は、だまつているか、頭を下げるか、ただ従う、そういう態度は何かおかしいんじゃないかなあということを思っております。だから、いつもだまつてハイハイと言っているんじゃないに、言いたいことを言えるような子どもにしたいなあという気持ちがありました。なるべく子どもたちが言うことは取りあげるようにしましたけれども、たとえば、机を出してその上で何か作りたいと言うと、そんなことするのはさもさもいやそうに、ふくれてしまうのを、どうしたものかと考えこんでしまうこともありましたが、子どもたちの言い分を何となく退けてしまうこともあったんですね。

部屋がせまいので、いつも机の出し入れをしなければならなかったのですが、「そんなことやだよ」という子どもに「だって困るじゃないの」と言いますと「そんなこと言たって、先生困ったって、ぼくたち困らないよ」と言う子もいます。そうすると、大人ですすからうまいこと言いくるめて、それじゃ明日から順番にしようね、なんて言うのと、「順番は誰が先か」と言いかえします。きつと、その頃の幼稚園の先生方がお聞きになりましたら、やっぱり暮しむきのわるい所の子どもたちだとか、こまっしゃくれた子どもじゃないかなどとお感じになると思いますけれど、全然そ

うじゃないんですね。家にいる時と同じように、私たちにわがまを言える子どもというのを、私は考えていたんです。ですから自分が用意してゆかないで、子どもに話をしてくれと言われた時、「ちょっと、今日用意してこないからごめんね」と言うとき「なんだ、意地悪根性けつまがり」なんて、私にあぐたれをつくらんです。「いくらあやまつても許してくれないのね」って本気になって言いますと、「いいよいいよ」と許してくれるんです。先生と子どもというより、子どもたちのガキ大将という気がします。またリーダーということが言われていまして、子どもたちの中からリーダーさんというのを決めました。結局私たちの代行をさせた訳ですが、並ぶ時だとか、何かを始める時に「今日のリーダーさん」と言うので得意になって、私たちより上手に子どもたちを集めた子どもでも、リーダーをしたいと言うのでさせてみますと、何を言ってるかさっぱりわかりません。すると列の後の方から、「もうちょっとしゃんとやれよ」とか「しっかりしろ」とか声をかけてくるんです。すると先生に言われるよりも、顔をあかくしながらでも、ちゃんとそこを切り抜けて行くというようなこともありました。

一番困りましたのは、保育室がないので、広い部屋一つで、三

つの地域別グループが何をするにも、別々の所へ陣取ってしなければならなかったこととございます。そうしますと「○○グミはああいうことしてるから、こっちでもそれをやるうよ」ということができてきます。そういう時には、ほんとに困りました。何とかこちらでしたいと思っていたことに子どもを引きつけないがやりましたが、自分のグループで飽き足らない子どもは、そっと抜けだして別のグループでちゃんと遊んでいます。しかし先生たち同志、これに何とも言わないようにしておりました。そういうこと以外、その当時はきつと困ったんでしょうけれど、今になってみれば、何も思い出せませんで楽しかったというとしか覚えていないんです。

一番ユニークだったなと思うのは、一銭貯金というのをやったことです。これは何から始まったかといいますが、貧乏ぐらしをしていながら、子どもたちには毎日沢山の小遣いを持たせるんです。せがまれる度にやれば一日の額としては沢山になる。「一銭ちょうだい」「二銭ちょうだい」とせびる訳です。親はいくら内職しても間に合わないから先生から何か言ってくれというのです。私は思いつきで、少しがまんしてためて、自分の好きなものを買わせてみようという試みをした訳です。これには随分批判がきました。まず学生さんたちから、自分のグループでだけそうい

うことをして、もし一銭持って来れない子どもがあったらどうするんだ。その子はその子でなくなっていくじゃないか、というのは私の考えでした。人のまねをする必要はない、人が一銭貯金したからって、自分はしたくなくなければならないでもいいじゃないか、こういうのを子どもの中に育てたいなあと思っていたのです。手製の帳面を作って、一銭持って来ては、今日は自動車かいて、とか、ひよこ描いてとか言う子どもに、持って来た印に略画をかいてあげたんです。何となく羨ましそうにして通りすぎる子があれば、この次ネと言って、にっこり笑うわけです。使ってしまったいで持って来てためようかという気持ちになればよいと思っていた訳です。この話はきつと海先生に叱られるでしょうし、先生方にもおかしいんじゃないですか、と言われそうです。

何も画一にしなくてもよい、人がしているからとまねをしてする必要はない。そのことが子どもの気持ちを傷めつける形にならないうちに、先生の方でそれにかわる何かを心がけるといことを、保育の中で考えたらいいんじゃないかという考え方だった訳です。

地域別年齢混合保育でもっといろいろございますけれども、この辺で――。

(練馬高等保母学院)